

記憶、つなぐ。

戦争体験者の話は、現実に戦争があったという証拠。そして貴重な記憶です。今、私たちにできることは、その記憶をつなぐこと。戦争体験者の話を聞き、皆さんが戦争の記憶を後世につないでいきませんか。

「教育召集だから、1か月すれば戻ってくるよ」この言葉に家族の誰もが出征の悲壮感など感じませんでした」と澄江さんは語り始めました。

当時、小学3年生の澄江さんには、お母さん、お兄さん、弟さん2人、そしてお母さんのお腹には妹さんがいました。「父が召集されたのは昭和19年8月、35歳のときでした。そのときは、1か月もすれば帰ってくると本気で思っていました」と当時の記憶を振り返ります。

それから、宇都宮へ向かった澄江さんのお父さんの兵蔵さん。入営の前日は家族で記念写真を撮ったそうです。その写真には、本当に悲壮感はなく和やかな雰囲気、一見戦時中とは

すぐ帰ってくるって 言ってたんだけどね

思えないほどの雰囲気も感じられません。

澄江さんは父の兵舎に会いに行った記憶を「父の勤めていた鉄道会社の同僚に連れられ、宇都宮まで面会に行きました。母は妊娠していたので、私と兄、そして伯父と一緒にきました。父の顔を見たときはうれしかったですね」と笑顔で話します。「ただ帰るとき、父の後ろ姿がとても寂しそうで」と当時の様子を振り返ります。

その後、宇都宮にいる兵蔵さんから手紙が届きました。そこには「子どもの顔を見るとつらくなるから、今度から連れてこないでくれ」とあったそうです。「それを聞いたときは少し寂しかったですね」と瞳を潤ませました。

せる澄江さん。「でも、あと数日で帰ってくると思っていたので、楽しみに待っていました」

「いよいよ明日

が兵蔵さんの帰宅予定日となり、翌日の服を用意し、届けたといいます。しかし、兵蔵さんが家に姿を見せることはありませんでした……。

「いよいよ明日だっていうのに、フィリピンに行くことになってしまいました。私は、正直状況がよく分からなかったですね。本当に突然のことでした……」と遠くを見つめ、語る澄江さん。「でも、その後フィリ

戦没者追悼式

町では、戦没者追悼式を開催します。遺族や関係者はご参加ください。

▼期日 9月21日(土)
▼時間 午前10時
▼会場 邑楽町公民館
▼問合せ 役場健康福祉課 47-5024

第10回特別弔慰金

▼支給内容 額面25万円(5年償還の記名国債)

▼対象 戦没者などの死亡当時の遺族(基準日に、公務扶助料や遺族年金などを受ける人がいない場合)

※優先順位は次の通りです。

- ①基準日まで「戦傷病者戦没者遺族等援護法」による弔慰金の受給権を取得した人
- ②戦没者などの子
- ③戦没者などの死亡時に生計を共にしていた父母、孫、祖父母、兄弟姉妹、婚姻や養子縁組により、基準日で氏が変わっている人は除く
- ④③以外の父母、孫、祖父母、兄弟姉妹
- ⑤①～④以外の3親等内の親族(戦没者などの死亡時まで引き続き1年以上生計を共にしている人に限る)

※基準日は平成27年4月1日。

▼請求期限 平成30年4月2日

戦争を知らない世代が続ける —平和への祈り— 第33回 邑楽町平和展

▶期日 9月3日(土)
▶時間 午前10時～午後3時
▶会場 町立図書館

※パネル展示は8月26日(金)から。図書館開館日の午前9時～午後6時になります。

▶内容 パネル展示、戦時食の無料配布、昔の遊び体験、アニメ上映会、朗読劇、講演会、風船飛ばし、読み聞かせ、模擬店など

※復興支援の一環として、熊本市の特産品の販売を行う予定です。

▶問合せ 平和展実行委員会事務局
役場子ども支援課(小林) 47-5511

▼請求先 住所地の市区町村役場

▼問合せ 県国保課 02-71226-2678 役場健康福祉課 47-5024

←写真の裏側には、お父さんの名前。
この字はお父さんの字ではなかったそうです

ピンから手紙が届きました。父の字は達筆だったので、小さな私にはほとんど読めませんでした。けれど、子どもへのメッセージはカタカナで書いてありました「そのときの手紙は、子どもの澄江さんにとっては父が生きているという最後の証しとなりました」。

「今考えれば、私が読めなかったところには、大切な何かを書いてあったのかもしれない」それから、兵蔵さんは戦争が終わっても家に帰ってくることはありませんでした。

昭和22年7月
10日付県知事からの死亡告知

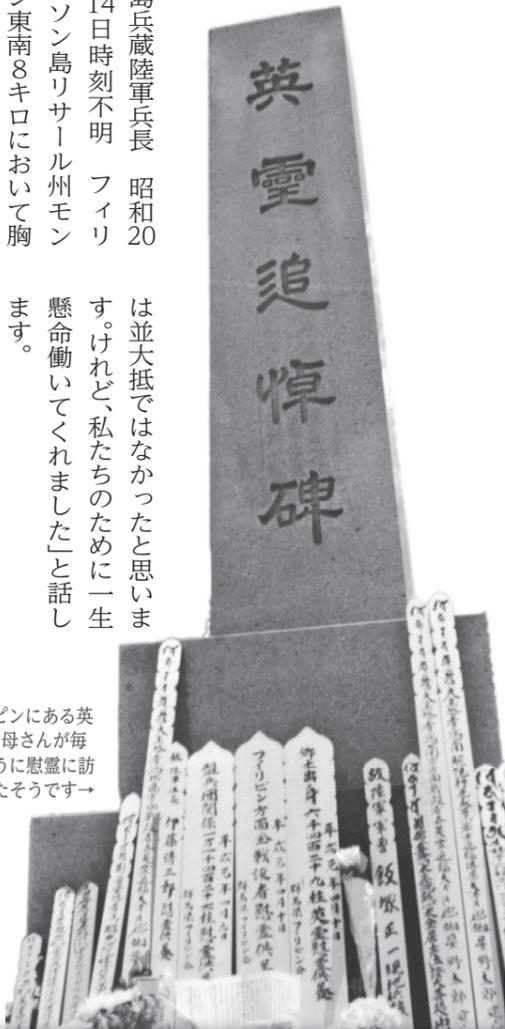
書。『石島兵蔵陸軍兵長 昭和20年3月14日時刻不明 フィリピン・ルソン島リサル州モンタルバン東南8キロにおいて胸部砲弾破片創に因り戦死せられ候。この段通知候なり』黄色に変色した一枚の紙切れでした。これは、父の死を意味するものでした「澄江さんは当時の記憶を話します。「それからは収入もなくなり、その日の食事を心配する日々が続きました。私たちも大変でしたが、母の苦勞

は並大抵ではなかったと思います。けれど、私たちのために一生懸命働いてくれました」と話します。

「母は34年前に亡くなりましたが、毎年のように、フィリピンに慰霊に出掛けていました。旅費は「お父さんのお金だから」といって遺族年金を充てていました。父に対する母の愛情を感じましたね」と澄江さん。

今年、80歳を迎えた澄江さんは戦争について「辛抱の連続で

フィリピンにある英霊塔。お母さんが毎年のように慰霊に訪れていたそうです。



出征後に撮ったと思われる最期のお父さんの姿。死亡告知書と一緒に送られてきたそうです。今は大事な遺品となっています。